

与論島の海と柑橘にみる多様な文化

大西 正幸

■ 参加者

石川 隆二：講演者（弘前大学農学生命科学部教授）

与論高校 1 年生と 2 年生の計 39 名：講演聴講者

座談会参加者：

講演を聴講した与論高校 2 年生のうちから 9 名、教員 1 名（倉津 浩丞）、弘前大学農学生命科学部 2 名（内海 夏樹・棟朝 南）、および総合地球環境学研究所の研究プロジェクト（大西 FS）関係者 6 名（石川 隆二、狩俣 繁久、宮城 邦昌、當山 奈那、長田 俊樹、長田 マキ）

■ はじめに

南西諸島においては、方言や文化の多様性、海—山—植物—動物の多様性、景観の多様性がみられる。これらのつながりが生活している住人にとってどのような意味があるのか、ここのファクターに因果関係はあるのかなどについて、議論をこころみた。皮切りはカンキツの多様性であるもののそれをとりまく背景や人の感覚について意見を交わした。

■ 対話の記録

実施日：2015 年 1 月 16 日（金）

場所：与論高校（鹿児島県大島郡与論町）

講演では、作物の起源について紹介し、いかに南西諸島や与論でのカンキツ系に特殊な在来種が存在しているかについての基礎、また、このような遺伝的な多様性が文化的多様性に大きく係わることを紹介した。講演のあと参加者との対話をおこなった。以下に、幾つかの話題とその背景を記し、それぞれについての対話を再現する。

伝えられる知恵と伝わらぬ島ミカン

沖縄の主要農産物として、サトウキビ、ニガウリ、熱帯果実などがあるが、北部での主要な農産物はシークワサーである。地元での生食以外にも加工用として、ジュースや果汁を使った産業が成立している。本文にもふれたように果実の利用は「おもろさうし」にみられるように非常に長い歴史がある。与論島は鹿児島県に属するものの地理的距離としては奥に最も近い。お互いがみえる距離であり、時化で与論の船が奥に避難することもあった。そのためか、奥と同様に与論島においてもシークワサーが自生している。ただし、与論島ではシークワサーは商業的に栽培されていない。スーパーでは離島ではない鹿児島県内からのカンキツのみが販売されている。島内の調査では家毎にみられるといていくらいカンキツ系の樹をみる。しかも、小ミカンを指す方言名の“キンカン”、イラブー、シークワサーの方言名“島ミカン”、在来種である六月ミカンの方言名“イシカタ”が民家の軒先に実をつけている。1 月の対談時に訪れたときには、イシカタのみ実を付けていた。シークワサーは島についばまれ、残った実は台風で落とされてしまったのだろう。樹に残っている果皮には鳥のついでに後が残され、実の中には種子が 2-3 個残されているのみであった。民家でお話を伺うことのできたおばあさんからは自宅で食べる事があるとのことだった。しかし、対談



写真1 座談会前の講演の様子

で高校生に聞いたところ、これらのカンキツは一括して“ミカン”としてしか認識されていなかった。

石 川：みなさんのうちにはシークワサーの樹とかがあるでしょうか？

生徒たち：おじいさんちにはミカンがある。

石 川：でも、この温州ミカンではないでしょう？

生徒A：緑色のならある。青い。

生徒B：そう、酸っぱい！

石 川：たぶんそれがシークワサーだよ。ミカンといっても、いろいろなタイプがあるよね。皆さんのお家では門松にはミカンのせている？

生徒C：竹と、しめ縄と、あと真ん中にミカン。

生徒D：オレンジ色のミカンをのせている。市販かな。

石 川：それが温州ミカンですね。温州ミカンがミカンの生産の6割で、その他のカンキツ栽培もあります。残りの3割がグレープフルーツとか。シークワサーは0.2%くらいでしょうか。スーパーでシークワサーは食べたことがありますか？

生徒A：食べたことないな。

生徒B：食べていない。

石 川：沖縄ではお刺身ににかけていますが、かけたことはありますか？

生徒A：ふつうにおしょうゆだよ。

石 川：モズクにはどうだろう？シークワサーを使ったりするのかな？

倉 津：しないですね。普通は三杯酢です。

生徒E：南には甘いシークワサーあるの？

石 川：実はシークワサーにも酸っぱいのから甘いのがあるよ。甘いのと酸っぱさがあるよ。リンゴの酸っ

ばさはリンゴ酸だけど、カンキツ系はクエン酸がすっぱさのもとですね。果実が甘くても酸っぱさも同時にあるんですね。この時期には甘くなりますね。

生徒 E：ミカンの英名がオレンジと思っていた。

石 川：unshu かな。マンダリンともいうよ。カンキツではシークワサー以外にイシカタというのが与論島にありますね。

生徒 A：そこらへんにじみにあるよ。

石 川：あれは六月ミカンといって日本の在来カンキツなので Citrus rokugatu という名前まであるようですね。皮が厚くて美味しいのでマーマレードにしてみたいですね。

記憶に残る海の知恵

高校生にとって、島のいたるところにある島ミカン、キンカン、イラブー、イシカタはただのミカンであった。これら南西諸島の在来種の識別ができないものの、海の生物の知識は極めて豊富であった。美味しい味覚として、そして身近な遊び場の危険な生物に関して豊富な情報を持っている。この知識は家族総出の磯遊びに由来するようだ。この家族行事の印象は極めて強いものであった。

石 川：正月も、与論はいつやるのかな？

生徒 A：お祝いごとがあったら基本します。

生徒 B：お酒が出た時点で、いつもやりますね。

石 川：正月のときはそれに加えて、昆布とかの縁起物が出るんだね。モズクも有名だよ。例えば、モズクそばがあるよね。普段は食べたりするのかな？

生徒 A：食べたことないよ。

石 川：給食とかでは出たことある？

生徒 E：うちの所では週 2 で出たよ！

生徒 B：モズクだけだったら給食ででるよ

石 川：ほかに、正月に食べるもので「うちは食べてるけど、(他の) みんなの所では食べてない」ものもあるのかな。

生徒 E：チャレンジでナマコは食べるよ。

生徒 B：え？ナマコはふつうに食べることない？

生徒 A：みんながみんな食べるわけでもないよ。みんながみているタイムラインにはのせないでほしいな(笑)。

生徒 B：正月じゃなくて、普通におとうさんがとってきて、煮て食べるんだけど、普通に美味しいよ！

石 川：海のものが多いんだね。ナマコとか…。あと特殊なものはあるかな。ふつうの魚もあるんだろうけど何種類ぐらいあるのかな？

生徒 B：あとはウツボかな。

石 川：ウツボ！

生徒 B：あれはお肌にいいんだよ。つるつるだよ。

生徒 A：ウナギかな。与論にいるよ。

石 川：ウミヘビとかは食べる？

生徒 E：あれは食べないよ、チャレンジャーだよ。

生徒 B：みたことは有るけど。普通にいるよ。

石 川：どれが危ないの？

生徒 A：しましまかな。

生他 B：あれは普通に危ないよ。

生徒 C：毒の量がハブの数倍かな。

生徒 A：ウドノスにはたくさんいて危ないよ。みなあそこで泳いでいるけど。

生徒 E：あ、ウドノスとかさ、掘ってたらあれ出てこん？「はまがめ」。

生徒 A：はまがめ！！みためかめみたいだけど、方言でパマガミ。味はカニみたい。

石 川：それはどう食べるの？煮るの？

生徒 A：揚げる。

生徒 E：エビチリにして食べる。

生徒 B：貝もあるよね、岩にくっついてるやつ。丸いやつ。

生徒 A：マガイ？

生徒 E：カタツムリみたいなやつ。

生徒 C：とんがって丸いの。

石 川：サザエとか、そういう感じじゃないのか。

生徒 A：都会のサザエでないから、とげとげないんだよね。朝鮮サザエだから。いつもとっているのはちがうから普通のサザエ売っているとおかしく感じる。

石 川：青森ならツブがあるけどね。カタツムリといったら、形はいているのかもしれないですね。

生徒 A：小さいものもあるよね。サザエじゃなくて、小さいやつ。

生徒 B：ティダラ？

生徒 A：丸いやつ。

生徒 B：あれは、好きだ。

生徒 A：あと、いざり。

生徒 E：夜、すごく（潮が）引くんですよ。

生徒 A：夜、真夜中に 1 時、2 時ごろに引いたり。冬が夜で、夏は明け方、いや昼に引くんです。そのときに行くんです。

石 川：そういうときって家族で行ったりするのかな？

生徒たち：はい、行きます。

生徒 E：タコだよね、やっぱ。

生徒たち：そうそう！

生徒 E：逃げ切れないタコを獲るのがいい。

生徒 A：いざりなら獲ったタコを食べるのが好き。

生徒 B：そうそう、逃げ遅れたのは穴にいるからそれを獲るの。

生徒 C：夜とかは魚が寝てるから、動かないから、そこにへばりついてたりするのが楽しいです。

石 川：そういうときって同級生とかいるのかな？

生徒 A：そうそう、あっちそういう家庭だよなって思うときがあつて。声が聞こえる。みんなで獲ってくるけど、暗いので、となりから「おかあさん、獲ったよ」なんていって。

生徒 B：あ、あっち収獲したんだって。やられたと思う。

生徒 A：テスト期間にやるからな？テスト期間にひいたりするからな～。シャコ貝美味しいよね。

生徒 B：ひらひらのところ、美味しいよね。

生徒 E：わかるわかる！

生徒 B：(教員がもってきた図鑑をみて) これ浜に上がってない？

生徒 A：普通にカツオノエボシいるよね。

生徒 E：うん、いるよ。この前、踏みそうやった。

生徒B：あれ危ないよね。東区にたくさんいる。あれは美味しいのわかる。

石 川：そういえば、シャコ貝はお金として流通したんだよ。

生徒E：お金と思ったら食べられないな。

石 川：魚だったらどうだろう。

生徒B：ミーバイは美味しいよね。

生徒A：オジサンの顔がすきだね。個人的に顔が。

生徒C：カワハギも美味しいよね。

石 川：畑で採れるものはどうですか。コメは？

生徒A：うちではお米採るよ。

石 川：でもここで作ってるのすごく少ないでしょ。

生徒A：水がでてないとね。

生徒B：もったいないよね。

島の文化

島独自の食べ物として長命草があり、家庭科などの校内授業の一環で学習しているようだ。その他にも島の炊き込みご飯である“みいまい”にまつわる具材の入れ方については母親から作り方を教わりながら、その意味について教わっている。そして、少しずつではあるが親の島社会の関わり方についても徐々に覚えていくようだ。そして、子供の強い感受性により、島で生きる女性の強さ、男親の共同体での社会生活のあり方を独自の観点でみていることがわかる。

石 川：おばあちゃんちで食べているような自然の草などありますよね。長命草といいましたか、そういう葉っぱは日常的に食べていますか？

生徒A：家庭科の時間かな。

生徒E：家庭科で作ったけど、ひどかったもんな。短命草かと思ったよ。死ぬかと思った。

石 川：家庭科で食べたの？どうやって食べていたんだろう。

生徒A：お茶にして食べたよ。ひどかったんで、のどが「うー」となった。

生徒B：いちばんよかったのはアンダギーかな。

生徒C：桑はあったかな。ヨモギも食べたよ。

生徒A：ヨモギは餅にいれて食べるよ。

石 川：関東では草餅にして食べるけどね。

生徒A：家庭科ではいろいろとやるよ。

石 川：家で餅をつくって食べる風習はありますか？

生徒A：タピオカモチやったよ。

生徒B：でも味がすごかった！

石 川：タピオカはどこから来たか知ってる？

生徒たち：外国？

石 川：英名はマニオクっていう名前かな。キャッサバという作物の根からとったデンプンを丸めたものがタピオカだよ。

生徒E：タピオカは実じゃないんだ。粉からつくるの？ブドウみたいな実から丸いのがでてくるのかと思ってた。

石 川：ヤマイモとか、自然の自然薯のようなものがあるよね。あのようなものが木の根の所にあって、それを使うんですよ。

生徒 E：ヤマイモならあるよね。

生徒 A：サトイモも作るよね。あれ、抜くのすごくつらいよね。

石 川：それは（与論に）特殊なものなのかな？

生徒 A：みいまい？とかかな。

生徒 B：でもあれはさつまいもでしょう。餅米もいれてるよね。

生徒 C：煮てつぶしてつくるよね。

生徒 A：あの食感にはゆるにゆる？あまくて舌触りがざらざらで…。給食やお正月、お祝いのときに食べるよ。

石 川：正月で食べるのはどのようなものかな？

生徒 A：吸い物と普通のご飯を食べるよ。

生徒 B：おせちは食べるよ。

生徒 E：「みしじまい」かな。

石 川：あれは昨日食べましたよ。

生徒 E：何でも入っているからたきこみでしょう。とりあえず豚肉入ってるよね。

生徒たち：ほかには、にんじん、ごぼう、しいたけかな。

生徒 B：あれは縁起がいいから、奇数の材料の数になっているよね。

生徒 C：お葬式のときは偶数だよ。

石 川：よく知っているね。

生徒 A：聞いてもないのに親がいつてくるからおぼえているんです。

石 川：ほかに正月に食べるものは有るかな？

生徒 E：ひたすら刺身食べてる。

生徒 B：あとはさきいか、ぴぬ？

生徒 A：そうそう、さきいか（ぴぬ）とおつまみの昆布、塩（注：昆布と塩麴をつけたもの）。

生徒 E：あと、飲みまわす。

生徒 B：そうそう、飲むときにだすよね。

石 川：与論献奉のことかな？子供もその輪に加わるのかな？

生徒 A：子供は飲まないの。

生徒 B：大人だけ。

生徒 C：正月の抱負をいうんだよね

生徒 D：75 歳のおばあさんもいつているよ。

石 川：昨日、飲んでいたらとなりの人が教えてくれたんだよ。観光協会の人が出て、日本には 3 つの憲法があるっていつてたよ。日本国憲法、少林寺拳法、それから与論献奉。

生徒 A：あ、お疲れ様でした。

生徒 B：あれは何回も回るんだよね。

生徒 C：そうそう

トートウガナシで家を訪ねる

方言文化は身近な島文化であり、ご飯を食べるとき、人の家を訪ねるときに何気なく使う方言を快く受け入れているように思えた。これも方言文化を大人から子供に誇りを持って伝えているからであろうか。そして、何気なく使う方言を媒体とした人間関係は島で生きることの心地よさを感じさせるのであろう。

石 川：やっぱり普段は海のことを多く食べるのかな。今日はミカンをとりに伺った家では、おばあちゃんのいつていることが時々わからなくなったりするんだけど。方言は？わかる

生徒A：少ししかわからない。

生徒B：茶花地区はイントネーションがおもしろい。

生徒A：地区ごとに違うよね。那間は難しいっていった。

生徒B：そう。那間は全然わからん。なにってんのってかんじ。

石川：じゃあ小学校はいくつあるんだっけ？

生徒たち：3つです。

石川：じゃあその地区ごとにイントネーションは違ったりはするのかな？イントネーションで「ああ、あの地区の子だ」ってわかりますか？

生徒E：そこまででもない。なんとなく違うかなって感じ。

生徒B：城（ぐすく）と那間（なま）もちがうよね

生徒A：こっちとしては一緒。

生徒B：違うんだって！違うんだって！

生徒E：うちは関西弁やから、ほぼテンションでわからなあかん。「あっちのテンションではたぶんこんなことってんだろうな」って。

生徒A：あとあと聞いたらけなされてたんだなって気づくこともある。いわれてもわからないときもあるかな。いわれてばかにされてもわからない。

生徒B：笑いながらいうからね。

石川：なにか小学校とか、中学のとき方言のコトを勉強する機会がありましたか？

生徒B：菊さんが来たときとかに勉強したね。

生徒E：小学校のときはずっと。小学校のときって何かと方言じゃなかった？「わなや」とか。

生徒B：わかる！いただきますと、ごちそうさまと帰りの挨拶。

生徒E：校歌が方言だもんね。

石川：校歌が方言なんだ？

生徒E：なんかラップ調で入ってるんですよ。

石川：君たちは方言を使う機会ってあんまり無いの？おじいちゃんと話すときとか方言で話すと喜ばれたりとかするのかな。

生徒A：食べたとき「まさい」っていたらすっごくよろこばれた。5歳くらいのとき「みったんまささんど」っていったらすっごい喜ばれた。

石川：お店を出るときに何かいわれたけどそれが「まさい」だったのかな？何か、お店を出るときにかけ言葉ってあるかな？お店出るときに声かけられたんだけど、

生徒E：それ、トートウガナシ。

生徒B：みんなトー“ト”っていうけど、2つめは“トゥ”だからね。トゥは英語の“To”だからね。

石川：「ありがとう」って意味なんだね。そんなときはなんてって返すのかな？

生徒A：ガンチガディですね。がんちがでい。「ディ」。

石川：いわれたらそういうの。社交的にはいうかな

生徒E：サービターンはふつうにいうかな。「サービターン」「はーいー」みたいな感じで。店に入るときや家にはいるときに普通に「サービターン」いうかな。失礼しますかなって意味だよ。

生徒A：驚いたときは、「わい」とか「ウバヤ」「アバヤ」とかいうね。

生徒B：「アバヤ」はいうよね。

生徒E：ワイタンやワイタンデでもいうかな。

生徒A：水がかかったら「アバヤ」。

生徒B：忘れものしたら、アッシューかな。

石 川：しまったっていう意味？

生徒たち：感情を込めたびっくりマークかな。

生徒 A：にほん語ではいけないね。

生徒 B：かわいそうなときもアッシャーっていうもんね

生徒 E：くしゃみしたときもウックスバラヤっていうよね。

生徒 B：うー！

生徒 E：くしゃみ出たときのまじないかわかんないですけど、ずっととなえていますね。魂が出るからかな、何回もいうね。

沖縄と与論をつなぐ言葉

同じ県内でありながら、島の言葉は鹿児島市内では意味が通じていない。沖縄方言とも近いわけではなく、島独特な方言があることを高校生は既に知っている。ただし、天気予報などの地理的な情報を含む場合は沖縄に非常に近いことはわかっている。彼らは島の地理をフェリーで移動する時間で体験している。

石 川：その与論の方言と他の島と似ているところは有るのかな？

生徒 A：与論孤立してたからかな。なんか前、一覧表の中で与論だけぶつとりと違った。沖縄とも違った。

生徒 B：何かで聞いたけど与論だけ別なんだよね。

(一同、壁に貼ってある「方言マップ」に視線を移す)

石 川：方言マップかな。沖縄の、奥という地域で 60 年くらい前には、炭を売りに他の地区にでかけて、そのときに買ったものを与論まで持ってきたりしていたようですね。そういう交流をしてたっていうから少し方言が似ているのかなっていう気もするんだけど。

生徒 E：沖縄の方言はなんかゆったりな気がする。

生徒 A：沖縄には「さ〜」をつける感じがあるけど与論にはない。

石 川：良くテレビでもみるよね。ほかの地域でも与論と似ている言葉を使うところってあるんですか？狩俣先生はご存知ですか？

狩 俣：与論では「ハナ」を「パナ」とかいうじゃないですか。それは宮古島でも「パナ」という。

一 同：へ〜。

石 川：「パナ」ってどういう意味なんですか？

狩 俣：花のこと。今帰仁でもですね。奥も「パナ」ですね。沖縄にも多くの言葉があるので、調べたら与論にもあるかもね。それから花をパナ、バナっていうよね 与論をパナウル王国というようにも使いますね。バナっていうのは花のことで、ウルっていうのはサンゴ礁のこと。奥もそうですね。

生徒 E：「サバ」が通じんちゃ。

生徒たち：そう！サバが通じない！

生徒 E：一番通じないのがサバ。

生徒 B：鹿児島から通じない。

生徒 A：履いているものをすべてサバっていうんですけど。

生徒 E：だから、「サバとって」って新任の先生にいったらパニックおこすやん。サバってなんよ〜！って冷蔵庫の中を探しそう。

生徒 A：与論好きな鹿児島のいところが、サバっていうんだって自慢してくれてた。みんなスリッパってしかいわないから。

石 川：君たちの感情の中では沖縄と鹿児島のどちらに近いんだろう？

生徒 E：テレビは鹿児島をみますね。



写真2 座談会に参加した皆さん

石 川：沖縄と与論ではどちらのTVをみますか？天気予報はどちらをみる？

生徒たち：それは沖縄！

石 川：台風情報だって沖縄から来るよね。与論では台風とどきどきに沖縄の天気予報をみる。それでも沖縄ではなくて沖縄の北の方をみないとあたらない。

生徒E：東京にいったときはあんなに騒ぐのにさ、与論に風速すごいのが来てるのにほぼ無視だからね。

生徒A：そっち30m（風速）でしょ、こっち60mだから！みたいな。

生徒E：みた感じでもわかる。どうみてもあっち土砂降りだなみたいな。

生徒A：何で沖永良部はあって、与論の天気予報はないのかわからない。

生徒B：時々消えてるもんね。かつてに海に沈んでる。

生徒A：あと、映っていても点だったり、ちゃんとクジラの形してなかったり。

石 川：君たちは修学旅行とか、行ったりするのが島外に出る公式行事的なものなのかな？

生徒E：あと、遠征ですね。だいたい全部本土とか、沖縄とかですね。

石 川：遠征だとか、スポーツ大会だとか、それはどこでやるんだろう。沖縄？鹿児島？県大会とか。

生徒E：今年は県大会は鹿児島とかですね。

石 川：沖縄にいったりするのは交流試合とかであったりする？

生徒A：沖縄がこっちに来たりする。

生徒E：高校の練習試合では外に行きますね。

生徒A：船ででかけてるのにね。20時間もかかるのにすぐ帰って来る。

石 川：普通の船だったら、奥まで行くのに1時間ぐらいで行けてしまうそうですね。昔の人はそうして（そのルートを通して）来たんだろうね。

与論島の絆

島外に出たときの同郷の絆については親や兄弟の体験を通して知り、それが当たり前であると感じられる。

島にいるときにも感じられる同郷の絆は子供の目からはどうみえるのだろうか。

石 川：島外にいて、与論の人がわかるというけど、話してみないとわからないじゃないのかな。どこで与論の出身者っていうのがわかるのだろう？

生徒A：（親は）付き合った後に、与論だったの？ってわかる感じ。

生徒B：誰が何処に行ったのかわかっているから、この辺に行ったら会えるはずってわかる。

長 田：すごい世界だな。

狩 俣：郷友会というのがある。八重山郷友会とかですね。奄美が豪友会っていうのかな？与論の人が東京に行って、同じ出身の人に会ったりしたときに…。

マ キ：沖縄の人は、みた感じの雰囲気であったりするんですか？

狩 俣：僕は顔をみたらわかりますね。表情とかね。全部（すぐに）わかるわけじゃないんですよ。立川にいて、デパートの前で立ってしゃべっている2人がいて、「たぶん沖縄の人じゃないかな～」と思ってさりげなく行って、ゆっくり歩いて行ってなまりで「あ、やっぱりな。」という感じ。

生徒A：みた感じ、その島という感じなんですね。

狩 俣：宮古島の人はみてわかりますよ。

生徒A：住む世界がまず違うからなにもかも。同じ共通語が通じるのに完全アウェーな感じがする。だからあまり鹿児島から出たくないな。

石 川：男の子もそうだったけど。顔つきも違うから、そういうところで自分に無いから、他の人にとっては、「すごく違う人が来たんだなあ」というように、いい意味でね。違う部分が良くみえるんだろうね。

生徒A：偏見だけど、関西の人はすごくフレンドリーな気がする。

マ キ：歌上手い人いるね。沖縄には。

そう。私一回フィリピンでアイヌの人みて、日本人の顔わからなくて、長田さんの顔しか知らなかったから、「日本人はみんなこんな顔なんだ」と思った。

生徒A：わかるよね。熊本とか長崎の方に行ったり、食べ物無いときは沖縄のほうに行ったりとか。あちこち交流がありますよね。

長 田：いま狩俣先生がおっしゃったように、与論出身者の会というものは与論にはあるんですか？

生徒A：あります。鹿児島の大学とか行ったりすると、そこで先輩たちがサークル作ったりして。

長 田：それが与論会っていうんだ。

生徒B：あと関東支部の与論会とかもある。

倉 津：お姉さんはなんか入ったりとかしてんの？なんか役員とかやりそうだよ。

生徒A：なんか、なんか、総務やってます。

倉 津：そういうの好きそうなん。

生徒A：そういうのさせられる一家なんです。

倉 津：「いや～」とかいいながら、生き生きしながらやってるからね。

生徒A：やりますよ。責任は最後まで果たします。私は結構与論島の交流のとか行ってるんですよ。小学校のときも大牟田と与論島は昔すごい仲良かったから、そういう機会もいったし、沖縄のこのまへの返還何周年のやつにも行ったんですけど、与論の人たちフレンドリーにしました。同じ与論出身って人が結構いたんですよ。

石 川：絆が強いんだね～。

生徒A：そこで集まって、与論の人たちが来るって交流会でみんなすごい繋がってました。

石 川：そしたらまたそこで献奉したりするんじゃないの？



写真3 「ミカン」を食べる座談会参加者の皆さん

倉 津：まだ、アルコール早いかな（？）。

狩 俣：ジュースで与論献奉やったらいいんじゃないの？

生徒B：正月のときとか、代わりにお茶を入れられるよね。

石 川：やっぱり、そういうふうにとまとめ役の人がいるからそういう絆って出来るんだろうけどね。

生徒A：でもそういうのが有るといいところも有るけど、悪いところも有って。行かない人たちが、あまり仲良くなれないとかそうなっちゃから。

倉 津：そういうのが好きな人は好きだけど、嫌いな人は嫌いそうでもんね。

生徒A：好きない人（？）以外は家に呼ばないみたいな感じだから。島特有だよね。こっちで仲良く、こっちで仲良く。シャイなんですよ、基本的に与論の人はシャイなんです。

倉 津：結構オープンマインドだけど。

生徒B：べらべらしゃべってる人がいってもね。

倉 津：あなたはすごくオープンマインドだと思う。

生徒A：シャイですよ。これでもチキンです。

長 田：あんまりシャイですよって大きな声でどんどんいってもだれも信じないから。

石 川：シャイな人はシャイっていわないから。

生徒B：こういう人をシャイっていうんだよ。

南か北か—島を出るとき

進学を考えている高校生だからだろうか、彼らはやがて島の外に出るのが普通であるように考えていた。しかし、将来を考えると島の絆の心地よさからか、やがては島に帰ってくることも考えているようだった。近所のおじいさんやおばあさんの心優しい接し方が島に帰るのが当たり前だと考えさせるのだろうか。

石 川：君たちは、高校でたら大学を考えたりするのかな？まだ早いかな？

生徒 A：そうです。その（進学を目指しているコースの）組です。

石 川：琉球大学とか、南の人は、より南の方よりも、より南の方に行きたがる傾向があるって

生徒 A：だって変わらないじゃないですか、生活が。暖かいし。台風来るし。

生徒 E：そう！台風来ないところに行きたい！

生徒 A：台風弱いところがいい。

生徒 B：雪みたいし！

生徒 E：天気図で台風の目がわかるじゃない。

石 川：うちにも沖縄から来た人があるんだけど、何年か続けてきて、したらね「北に行きたかった。でも北海道は北過ぎるので手前でやめときました。」っていったね。

生徒 A：わかるわ。

石 川：やはり（南の方は）似ているから、知ってるところよりは少し北のところがいいかな。

生徒 E：沖縄の大学にいても、アパートに帰ってきたらお母さんが合い鍵で家にいそう

石 川：そういうことにもなりそうなくらい近いんだね。だから大学を目指すとしたら北の方の大学を目指すんだ。

生徒 A：でも島の人の方が本土の人よりも独り立ちがはやいよね。でも都会の人は家から行くじゃないですか。

石 川：弘前大学の学生はどうなんだったろうか？

内 海：出身宮城なんで、僕も南に行きたいなと思っていました。東北なので。だけど、まちがって来たちゃったって感でしょうか。

石 川：棟朝さんはどうでしょう？

棟 朝：あ、北海道出身です。

生徒たち：あ、北海道は寒そう。

生徒 E：食べ物がおいしそう。メロン～とか。農産物がおいしそう。

石 川：大学が終わったら、与論に帰ってきたいのかな。

生徒 A：卒業生はやたら与論好みます。「与論帰りたい」って。

生徒 E：すぐに休みに帰ってきてずっと与論にいる。

石 川：本州に住んでいる人たちは、1週間ぐらい帰省して、そのあとすぐに帰ったりしてしまうけど、こっちは人は休みの期間をずっとこっちで過ごすんだ。

生徒 E：ずっといる。「もう学校始まってるよ、（まだ）こっち～！」ってぐらい。

生徒 B：部活に毎回参加するとか。いつまでいるの？みたいに。

石 川：君たちは、与論島で他の県の人たちに自慢できるところっていったら何がある？一番は。

生徒たち：海？海かな、やっぱり。

生徒 E：与論ってば海だよ。

生徒 B：海しかない？

生徒 E：冬に与論来る意味が分からない。

生徒 B：修学旅行生とかね！

生徒 E：なんで今きたの！夏でしょ！みたいな。

石 川：それは泳いだりするためにきたってことかな？

生徒 A：泳いだり、貝をひろったり

生徒 E：今、泳いだら寒いですよ。クリスマスイヴも泳いでるから、俺ら。シャワー冷たかった。

生徒 A：でも夏も台風来るから修学旅行生も大変だよ。来るの。

生徒 B：(台風で) 閉じ込められるしね。

生徒 A：このクラスはオープンキャンパスも台風でいけなくなりました。

生徒 A：こっち旅行とかもタイミングだもんね。予定立てても、飛行機とか無かったら延期だし。

生徒 B：修学旅行も船の中で一泊。

生徒 A：台風で風がつよくて帰れなくなったり。この上空で台風ができたからいけなくなったんだ

生徒 E：体育祭、オープンキャンパス、文化祭、修学旅行、全部台風が来とるじゃん。文化祭のときなんかこの上空で台風できたのにさ。

石 川：でもあれだね、台風なんかがあっても、この島に帰ってきたくなくなったりするいいところもあるんだね。

生徒 A：でも最近与論も台風に強くなったよね。風が強くなって、風速 40～50m まだ大丈夫、50～60m ならなんか対策しようとかいって。いろんな人から知恵をもらって対策しています。

石 川：地域は変わるけど、青森県なんかだとすごく早く雪が積もっちゃって、弘前でも 1 m 以上雪がつもるんですよ。

生徒 E：雪はないね。俺、雪みたことないもん。

生徒 A：送られたりする。ふわふわでなくて、堅いんだよね

生徒たち：そうそう。

生徒 E：全然嬉しくない。

生徒 B：ふわふわじゃないもんね。がちがちになってて。

生徒 E：雪だるまつくろうぜ～って箱開けたらガツン、みたいな。

石 川：いい時期に行くとふわふわの雪があったりなんかしてね。

生徒 A：雪は、いいなと思うけど寒そう

石 川：では与論にこんないいところがあるということを聞いてお終いにしたいと思いますが、どうでしょう。

生徒 A：自然、景色ですかね。遮る建物がないから、高台とかから海がみえる。海がみえて、山がみえて…、という感じが。

生徒 E：どっからみても畑と海がみえるよね。「ざわわ、ざわわ」っていう感じだね。

長 田：みなさんは、将来的には与論に戻ってきたいと思いますか？

生徒 E：世界に羽ばたきたいかな～、どうかな～。

生徒 A：地域の目があるから子育てにはいいかもしれない。そういう会話があるから、そのときには帰ってきたい。

■ 考察

カンキツ系についての概念はあまり明瞭でなく、指摘されないならば単なる「ミカン」という認識しかなかった。島の固有植物についての生物学的知識は学習してはいなかったが、カンキツの性質についての体験的な知識は有していた。一方、海の生物の知識はかなり深く、危険生物の生息場所や外観による識別などについて、さらに毒性の強度などについても深い知識を有していた。これは生存するために必要な知識であるとともに、住んでいるヒトが魅力を感じる体験を海で行うことができるからであった。磯拾いという行事のなかに家族内の深い連帯を感じ、生活圏としての「不便さ」がありつつも、豊かな海の自然環境について魅力を感じていた。そのため、外部に向かっても海の豊かさを発信したいとの感心が高かった。

村の生活に魅力を感じている学生も多く、そのためか将来的に島に帰って子供を育てたいという希望が女性に多くみられた。これは都市部にはない、密な人間関係や文化的な魅力にあるものだろう。この地域において働く場所(永続的な社会生活を可能にするシステム)を築くことができれば、豊かな生活を生み出す社会提言が可能になる。議論のなかにおいて、豊かな海での磯拾い(?)を体験するツアー、在来カンキツの特徴を活かした換金性作物への転換なども 1 つの発想であることが提案された。

■ 謝辞

島の暮らしには魅力的な面があり、それらを島特有の生物の多様性や文化が支えていることが理解できた。高校生の年齢で島に帰ってきたいという誇らしい地域の人間関係が何よりも魅力的であった。そのことにあらためて気付かせてくれた、与論高校の生徒さんらに感謝言葉を送りたい。